読解力育成のために

―国語教育におけるアダプテーションの教材としての可能性―

桐生　直代・東　茂美

For reading comprehension development
—Possibility as a teaching material for adaptation in Japanese language education—

Naoyo KIRYU and Shigemi HIGASHI

「福岡女学院大学大学院紀要　発達教育学」第 9 号
2021 年 3 月

原著

読解力育成のために
—国語教育におけるアダプテーションの教材としての可能性—

桐生　直代*・東　茂美**

For reading comprehension development
—Possibility as a teaching material for adaptation in Japanese language education—

Naoyo KIRYU and Shigemi HIGASHI

概　要

小稿は、アダプテーションされた作品を、国語教育においてどのように活用できるかの考察である。各々の教育課程において学びの質が見直されているように、従来行われてきた学習活動の手立てを、アダプテーションというフィルターをとおすことで、主体的に相対的に学び、深い学びの手段として再構築することを目指す。アダプテーションの国語教育への試みとして、先行研究をふまえつつ中学校国語科教材「走れメロス」の教材提供と、福岡女子短期大学にて行った授業実践から、授業構想の可能性を提案する。

キーワード：アダプテーション，文学教育，中学校国語教材

1　はじめに

たとえば、高等学校での古典において『源氏物語』の「桐壺」や「若紫」はほとんどの教科書に採録されているが[1)]、かなり複雑な時代背景や人物背景を理解するために、あるいは古典を身近に感じる材料として、漫画『あさきゆめみし』を扱うことは、ほぼ定番といってもよいであろう[2)]。漫画で読む古典文学全集も中央公論社や学研から出版されており[3)]、もはや古典は漫画で学ぶのがセオリーといえるかもしれない。いわゆる現代文で扱う近代現代文学においても、イーストプレス社の「漫画で読破」シリーズは100のタイトルを超え、今や古今東西の文学のそのほとんどを漫画で読むことができる[4)]。

それでは、これらの漫画は学習においてどのような効果を挙げているのだろうか。ともすれば、興味関心をひくためのネタで終わってはいまいか。または、受け手側にとって、それが理解の主になり、学習材である古文との逆転が生じてはいないだろうか。そこには、漫画のわかりやすさが、学習者に古文への苦手意識を持たせるという転倒の危うさがあることも否めないであろう。あくまでも「教材」である以上、その使い方に十分の配慮が必要なのではないだろうか。

物語・小説の漫画化は、いわばジャンルをまたいだ書き換えである。文学研究において、原作となる小説や戯曲を、映画化などの他ジャンルへ翻案するに際して、脚色ないし潤色することをアダプテーションという。小説を脚本へ書き換えたりするメディア変換や、古典を現代の物語に置き換え書き換えたりするような時代変換もこれを指す。詳しくは後に述べていくが、初等教育、中等教育、高等教育の国語科において、視点を変えて物語を書き換える「書き換え作文」や「リライト」が学習活動に取り入れられてきた[5)]。これらの活動においては、主体的に創造的に解釈したことを表現することに重点が置かれるが、漫画も描き手のメディア変換という手段を用いた解釈のひとつ（アダプテーション）である。アダプテーション研究において、原作に忠実かどうかは優劣に規定されず、翻案を製作する過程に着目することが主眼となる[6)]。

大橋洋一氏は次のように述べている。

> アダプテーションは作者の側からではなく、読者の側からのアプローチなくして、その特性をみきわめることはできないと考える私たちにとって、読者＝受容者は、テクストに対する認識過程の中で、絶えずテクストを書き換えていると考えられるのです。<u>読者こそがアダプターなのです</u>。そしてこのことは、読者が自らを改作者と強く意識しなくとも生じていることです。テクストが認知され受容されるとき、受容者は、それをつねに状況に適合させるのです[7)]。　※下線部は筆者による。以下同じ。

大橋氏の「読者が自らを解作者と強く意識しなくとも

*　福岡女子短期大学
**　福岡女学院大学

生じていること」を、国語科教育が目指すところを添わせると、まさにここが、主体的な読者の育成の起点となるであろう。児童・生徒・学生が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりすることで、主体的な学習者となるのである。

小稿では、アダプテーションの国語教育への試みとして、先行研究をふまえつつ中学校国語科教材『走れメロス』の教材提供と、福岡女子短期大学にて行った授業実践から、授業構想の可能性を提案する。

2　国語教育とアダプテーション

国語教育におけるアダプテーションについての論考は、木村陽子氏が高等学校「国語総合」教科書を調査して論じており[8]、小稿もこれに添うところが大きい。

木村氏は、学習指導要領（平成20年度）のなかで「創作」が重視されていることに注目し、一方向の授業から脱出することを目指した「学習指導要領」が期待する学習活動として「創作」が取り上げられたことを指摘している。さらに、その創作課題の特徴として、従来の国語教育で提唱されていた「書き換え作文」に相当する「リライト」が、現代小説教材において多く取り上げられていること、「〈古典を現代の物語に書き換える〉アダプテーション課題」が多く設定されているという。そして、教職志望の学生たちには本格的なアダプテーションである小説の脚本化よりもリライトのほうが有効である可能性を示唆されている。

木村氏の研究対象は高等学校であり、小学校・中学校の教材にはふれられていない。しかし、「〈古典を現代の物語に書き換える〉」学習活動は、中学国語古典教材「枕草子」などにも見られ、「創作」については「少年の日の思い出」においてエーミールの視点で物語を書き換える活動が散見される[9]。執筆者の桐生は中学校国語科の教職課程を担当しており、中学校国語教科書教材の検討は今後の課題としたい。

それでは、2021年度から実施される「学習指導要領」を踏まえつつ教材選択の可能性を述べていく[10]。

「学習指導要領（平成29年告示）」
第１学年　２　内容
Ｃ読むこと
(1) イ　場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写を基に捉えること。
　エ　文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること。
第２学年　２　内容
Ｃ読むこと
(1) ア　文章全体と部分の関係に注意しながら、主張と例示との関係や登場人物の設定の仕方などを捉えること。
　イ　目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味について考えたりして、内容を解釈すること。
第３学年　２内容
Ｃ読むこと
(1) ウ　文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること。

上に挙げた項目は、いずれも文章の読み取りについての箇所である。場面や構成、表現の効果の読み取りについては従来から大きな変更はない。今回の改訂で注目すべきなのは、これらを達成するための手段として「主体的・対話的で深い学び」が導入されたことであろう。

2017、2018年に改訂された「学習指導要領」は、「将来の予測が難しい社会の中でも、未来を作り出して行くために必要な資質・能力を確実に育む教育」、「未知の社会を生き抜く力を育む教育」という視点から「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」を示した[11]。

また、「深い学び」について、高木正木氏は、次のように説明している[12]。

> 「主体的・対話的」については、ある程度イメージしやすいと思いますが、「深い学び」が少し捉えづらいかもしれません。これは、具体的にいうと、例えば物語を読む学習では、ただストーリーを追うだけでなく、題名、人物、場面、心情など、読み取ったことの関係性をより多く発見し、読み方について自覚していく学びのことです。そのためには、小学校教科書では付録の「学習に用いる言葉」や「『たいせつ』のまとめ」、中学校教科書では、巻末付録「学習の窓一覧」などを使いながら、読みの観点を常に意識させていく指導が大切になります。

高木氏が述べる「読み方について自覚していく学び」は、他人の読み方の表れである漫画や映画などを鏡として、自身の読みを相対化するアダプテーションを教材として導入することで目指すことができるのではないか。そこから読みの深化をはかることもできるであろう。そこで、中学校において「創作」活動が多く取り入られている「走れメロス」を例に、アニメーション作品について紹介をしつつ、教材としての可能性を指摘する。

【テレビアニメ】
①「走れメロス」（『まんが赤い鳥のこころ』）　1979年
②「走れメロス」（日生ファミリースペシャル）　1981年
③「学研名作アニメ　走れメロス」　2000年
④「青い文学シリーズ　走れメロス」　2009年
【映画】
⑤「走れメロス」東映動画　1992年

平成28年度版の教科書における「走れメロス」の単元は、「描写に注意して読もう」（光村図書出版）「描写を味わう」（東京書籍）、「読みを深め合う」（三省堂）であった。たとえば東京書籍では、「人物や情景の効果的な描写に着目して、作品を読み深める」、「場面の展開や表現の仕方の工夫について話し合う」という目標が設定されている。また、「学習の手引き　言葉の力」において「登場人物の言葉や行動・態度などがどのように描かれているかに着目すると、その人物の人柄や考え方などの特徴、つまり人物像を捉えることができる」、「人物の描かれ方にどのような意味があるのかを考えると作品を深く読み味わうことができる」と手引きしている[13)]。

従来、教室で取り入れられてきたアダプテーション例として、「走れメロス」の原作であるシラーの「人質」との比較がある[14)]。たとえば、宗我部義則氏は「比べる」という思考・活動が、「考える力」を引き出し伸ばしていくために効果的だ」と「走れメロス」とシラーの「人質」を比較する授業を実践されている。シラーの「人質」が太宰によってどのようにアダプトされたかを検証していく授業と言い換えることができよう。そして、作品がこのような翻案を繰り返されることによって存続していくならば、太宰の「走れメロス」のアダプテーションであるアニメーション作品も、充分教材になり得るであろう。しかも、これらのアニメーションには多くの改編がなされている。

「名作」とうたった学研の「走れメロス」においては、「セリヌンティウス」が「フレンド」という名になっており、自ら人質になることを王に申し出ている。また、1992年の映画においては、セリヌンティウスの恋人「ライサ」など、オリジナルのキャラクターが追加されている。原作において「人を、信ずることができぬ」王は皇后を殺しているが、この映画には皇后「フリューネ」なる人物が登場し、彼女は王のためにメロス暗殺を企てている。

さらに、アニメとしては一番新しい「青い文学シリーズ」は、大幅な脚色、変更がなされており、太宰と思われる「高田」という作家の創作と友情の間にメロスの物語が組み込まれる作りになっている。

詳しくは別稿にて論じるが、以上のように、「走れメロス」の主な学習活動が登場人物の心情を読み取ることであるならば、これらのオリジナルキャラクターの登場が作品世界にどのように影響しているか、読み取ったことを映画と関連させ、その効果を考えさせることで「深い学び」の学習として成立することができるのではないか。何が変わり変わらないのかを生徒同士が意見交換し、さまざまな角度から検討していく活動は、「学習指導要領　読むことＣア　文章全体と部分の関係に注意しながら、主張と例示との関係や登場人物の設定の仕方などを捉えること」を踏まえ、第３学年では「ウ　文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること」につながる学びになるであろう。この見通しのもと、次に、アダプテーションされた作品を国語教育においてどのように活用できるか、福岡女子短期大学における授業実践報告からその可能性を見出していく。

もちろん、大学教育における文学教育は国語科教育ではない。しかし、自身の読みを自覚し、その観点を意識することは、文学研究の方法や自分を規定している枠組みの自覚につながるはずである。

３　授業実践より

●授業について

2020年度後期

２年生開講科目「作品研究」：受講者９名

授業概要：樋口一葉の生涯と作品を通して、人と文学について考える。和歌、日記、小説といった様々なジャンルを取り上げることで読む力を育む。

第１回目　オリエンテーション
第２回目　樋口一葉について
第３回目　一葉の和歌
第４日目　一葉の日記１
第５回目　一葉の日記２
第６回目　メディアの中の樋口一葉
第７回目　『十三夜』演習準備
第８回目～第12回目
　　『十三夜』講読（学生の演習発表）
第13回目　『十三夜』の挿絵
第14回目　『十三夜』映画鑑賞
第15回目　小説と映画の比較　まとめ

テキストは集英社文庫（解説　山田有策氏）。一葉の人生を和歌や日記から捉えたうえで、作品の講読を行った。演習の担当者は該当箇所の音読、概要説明、注釈をし、問題提起と自身の考察を述べた。また、担当学生から聴講者全員に問いを投げ掛け、全員で討議するというやり方を行った。発表者のレジュメと教員からのコメントは、その都度、福岡女子短期大学が使用するMoodleに挙げて全員が閲覧できるようにし、事前事後学習の学習材とした。演習において学生が注目したところは、お関、夫の原田、父親、母親、録之助の人物像、十三夜の月見（風習）、服装などの風俗、結婚制度、お関の母性についてであった。これに加え、授業担当者（桐生）からは女子教育・作品の地理情報をコメントの形で追加した。13回目の授業においては、初出誌の挿絵から文字テクストと絵画テクストの相関を行い、小説テクストがマルチモーダルなものであることをレクチャーした。映画の視聴後は問いに答える形で映画の考察をし、授業担当者はそれらを用いてアダプテーションの視点から文学作品を読む内容を講義した。

●『十三夜』について　あらすじ（「集英社文庫」梗概より）[15]

「十三夜」の中心人物のお関は高級官僚の妻であり、一児の母である。物語はそのお関が十三夜の晩に一人で実家の斎藤家を訪れるシーンから始まる。突然のお関の訪問に驚き喜んだ両親は弟亘之助の不在を残念がりつつも、彼女を歓待してやまない。しかしお関はそうした両親に夫・原田との離縁の決意を吐露したのであった。母はすぐお関に同情するが、父はそれを押し止め、お関はもう斎藤家の娘ではなく、さまざまな関係にからめ取られてあることを説き、例えば太郎の母であることを断ちきれるかと問う。最大の弱点をつかれたお関は太郎の側で死んだ気で生きていこうと決意するのだった。

帰宅途中、人力車夫がかつての幼なじみでひそかに心に想っていた高坂録之助であることに気づいたお関は、彼から転落の身の上を聞く。彼はお関が結婚した後その喪失感ゆえに放蕩にあけくれ、ついに虚無そのものへとなりかわっていたのだ。まさしく関係性のただ中にいたことを知った彼女は辛くとも生きていこうと彼をさとす。こうした二人の別れを月光だけが見送るばかりであった。

●映画について

『にごりえ』

1953年（昭和28年）11月23日公開。文学座・新世紀映画社製作、松竹配給。監督、今井正。モノクロ、130分。昭和28年度芸術祭参加作品。

樋口一葉の短編小説『十三夜』『大つごもり』『にごりえ』の３編を原作とするオムニバス映画で、芥川比呂志等、文学座の俳優が総出演している。第27回キネマ旬報ベスト・テンにて第１位。毎日映画コンクール日本映画賞（大賞）/ 監督賞 / 助演女優賞（杉村春子）、ブルーリボン賞作品賞。「原田せき」を丹阿弥谷津子、「高坂録之助」を芥川比呂志が演じた。

今井正監督は「此の映画を観る皆さんへ―演出に当って―」という文章で、一葉を「人間的な苦しみが深かった」と述べている。そして、「演出に際して、私は、一日として、セットで、原作をはなすことは出来なかった。水木、井手の両君がシナリオで充分かいて呉れているのに、さてカメラを据えるとなると、やはり原作をひもといて意味を考えた。形の上でも、原作をどこまで画面に生かすかが、力不足の私の必死の努力であった」と、どこまでも原作に忠実な態度を示している[16]。

脚本を担当した水木洋子は「尊敬する樋口一葉の小説を脚本にする苦心……」とタイトルをつけながらも、「私は敬愛する一葉の珠玉のような短編を心から栄誉に感じて、すらすらとよどみなく、あっと云う間に書くことが出来た。勿論日記を通読、当時の一葉の環境に自分が暮しているような気持ちで楽しかった。それは一葉と云う人の構成が無理なく、新鮮にくまれているからだ」と、具体的な苦心は述べていない[17]。したがって、授業では映画についての情報は、今井の言葉とパンフレットの紹介文にとどめた。

【原作と映画で、客観的に異なる箇所をあげなさい】

① 父親の「いはば私も福人の一人～」が省略されている。（３名）
② 母に水を汲んでもらいながら離縁の話を切り出していたところ。
③ 台所へ行って母の前で泣くシーン
④ 離縁について、初めに母親の前だけでいうところ
⑤ 太郎を諦めきれないことをはっきりと明言している。（３名）
⑥ 「いくら泣いてもいい母の前なら」というセリフ
⑦ 亥之助の登場。（４名）
⑧ 亥之助に「亥之さん、しっかり勉強してくださいね」と言っている。
⑨ 父の口から「不了簡を出すな」と言っている。
⑩ お関が帰った後の家の様子が描かれている。（２名）
⑪ 話し方が現代に近い。

まずはアダプテーションを理解させるため、「原作（小説）」と客観的に異なるところをあげさせた。①～⑩について問題はない。セリフの省略や追加への気づきが見られるが、演習において作品をよく読んだ効果の表れだと考えられる。⑪の「話し方が現代に近い」は、客観的な違いではないので問いに対しての解答とはいえない。しかし、ここにこそ、声で聴くことの特質が現われているのではないだろうか。俳優により会話として再生された言葉に、この学生はリアリティを覚えたと思われる。小説ではひとりひとりのセリフが冗長であるが、映画ではそれらが分断され、より自然な会話になっている。先に、⑪は問いに対する解答になっていないと述べたが、逆にここから問題を立て、音声言語の特色に気づかせることができよう。国語科教育の「脚本化」の学習活動においても、自然な会話を成立させるための要素として音声言語への言及も留意すべきであろう。

次に、アダプテーションの効果を把握させるために、映画のほうがよいと思ったところをあげさせた。結果は以下のとおりである。

【映画のほうがよいと思ったところ】

① 原作では録之助のセリフしかなかったため、録之助が本当に反省しているのかどうかわからなかったが、映像では録之助の表情の悲しそうな顔の描写があったため、本当に反省していることがわかりました。原作だけでは解釈しづらかったので、映像化でとてもよくなったと思います。
② 最初のお関が家に入るまでのシーンや録之助の車

を降りろと言っているシーンなど想像しづらかったところが映像化されたことで分かりやすくなったと思います。

③　登場人物たちの振る舞いや様子が原作である小説よりもわかりやすい。

表情や声色から登場人物らの感情がわかりやすい。

④　お関、母、父で話しているシーンでは、月明かりが差し込んでいる部屋の様子がよく分かりました。小説だとお関や母、父の長い台詞を追っていくだけになりますが、映像では十三夜の明るい月が出ていて部屋に少し光が差し込んでいるという美しい場面に、お関、そのすぐ横に母、離れて腕組みをしている父という構図が分かり易かったです。泣きながら話すお関、憤る母、難しい顔をしている父の三人のそれぞれの表情が分かるのも、この場面で登場人物たちがどのような感情を持って話しているのかをすぐ把握することが出来ると思いました。

⑤　最後の月の下でそれぞれの道に分かれる場面は小説でもとても印象深かった場面で、映画ではそれがさらに視覚的に分かりやすくなっていました。最後に登場人物の表情をアップで写すなどするよりも、引きの画角にしていることで、小説でのラストの印象的な場面をそのまま大切にしているのかなと思いました。

⑥　録之助の風貌や堕落感がわかりやすく描かれており、当時の身分等がわかりやすかった。

⑦　原作で読んでいたときよりは緑之助のだらしない印象がよりイメージ化された。また、緑之助とわかったお関の表情が映像の中でもっともいきいきしており、心から再会を喜んでいたことが伝わった。また、父の台詞に力強さを感じた。

⑧　録之助がお関を人力車からおろそうとするシーン
→とても疲れている様子、気力が無い様子が伺えることで苦労して生活していることが感じられる。
再会（お互いに気づく）シーン
→お関が先程人力車をおろされそうになったときの表情とはガラッと変わり明るくなった。お互いの再会を心より喜んでいる。

これらの解答からは、表情やしぐさ、声の調子など、いわゆるノンバーバル表現への注目が高いことが伺える。したがって、この授業においてはアダプテーションの効果としてノンバーバルコミュケーションが議論のテーマとして設定することができよう。コミュニケーションにおけるノンバーバルコミュニケーションの優位性については、たとえば就職活動の場面などで、学生は習得済みである。学習場面のみならず実体験でもって得た知識を、文学体験の中で理解することも「活用」のひとつだといえよう。知識と活用の往復により、知識は生きてたものとして定着し、教養となる。授業においては、教員側からのコメントだけに終わってしまったが、④や⑤があげた月明りの効果やカメラワークへの注目と合わせ、視点についての考察へと広げることができる。

【問３】

原作にはなくて映画にある場面や事柄を１つあげ、それによって『十三夜』の世界がどのように変化するか述べなさい（400字以内）。

この問いは、文学と映画の関係を、アダプテーションという視点からの考察を求めたものである。

①　お関が帰った後の両親のシーンがより悲壮感を引き立てていると思いました。

お関が戻った後の斎藤家の様子が描かれた場面。両親がお関の今後を心配する描写があって、より悲壮感が増している。

②　映画では「下」に差し掛かる場面で、お関が意を決して原田家を出た後の家の様子が映し出されていた。このことにより、父と母、亥之介が後ろ髪を引かれる思いでお関を見送った気持ちや悲しみが演出される効果があると思う。また、月見団子や月が出てきていて、タイトルをよく連想させる効果があった。

①、②はともに追加されたシーンの効果を述べた意見である。原作にはない残された家族を描くことで、それぞれが抱える悲しみを描いていることを見て取っている。また、次の③は、原作では不在している亥之助の登場に意味づけをしている意見である。

③　お関が父に諭され、原田に帰ることを決めからいのすけがうちに帰ってくる場面小説にはいのすけは会話の中でしか出てきませんが、父にいのすけの昇給のこともある等と諭されてから事情を全く知らないいのすけを登場させることで、太郎を置いてきたということはもちろんですが、大切な弟のためにも離縁するわけにはいかないという、父に諭されたからだけではないお関の頑固たる決意につながったように感じた。

お関が離縁を思いとどまったことについては、学生の中でも意見が割れ、お関は本当に納得したのかという疑問が学生から起こった。たとえば、ある学生はなかなか立ち上がらないお関の所作に決意のぶれを読み取っていた。亥之助の登場は原作を大きく改変しているが、今井監督の文章からは、その意図をうかがい知ることができない。しかし、亥之助が登場することで家族が内包する

関係性やしがらみが可視化されたといえるであろう。お関が決心せざるを得ない決定打として亥之助は登場したことを指摘している意見である。

④　映画では録之助の口から「ご身分の高い方」という言葉が出たことが、お関と録之助の立場の違いをはっきりと強調していて、それがこの場面や『十三夜』全体の悲しさを強めていると思いました。原作でも、録之助が遊びに遊び抜いて今のようになっていること、そしてお関はすっかり奥様になっていることから、お互いの身分が今では全く違うものになってしまったということは二人の会話からもよく分かりますが、映画での録之助のこの一言が、昔は幼馴染として同じ立場であり、お互いに好意を寄せていたのに、今となっては身分が変わってしまい互いに遠い存在になってしまったという事実が補強されていると思いました。録之助もお関も、自分の思い描いていた通りの将来にならず今現在苦しんでいる姿が、この時代の身分に左右される社会の在り方はもちろん、人生や恋愛が簡単には思うようにならない難しさも象徴しているように思います。

④の意見は、原作にはない「ご身分の高い方」というストレートな言葉が、お関と録之助の違いを明確にしていることを指摘している。まさに「今となっては身分が変わってしまい互いに遠い存在になってしまったという事実」を「補強」するための言葉であろう。二人の身分の違いは、身なりや車夫という職業、そして録之助が語る身の上話から知ることができ、さらに芥川比呂志の演技によって一目瞭然である。

では、本文ではどうであろうか。実は、お関が身分の高い人妻であることを表す記号としての装いは、物語の冒頭から折につけ語られている。たとえば、お関が離縁を申し出た時、父親は目の前の娘の「大丸髷に金輪の根」を結い「黒ちりめんの羽織」を羽織った豪華な奥様然とした姿に、離縁後の「結び紙に結いかえさせて、綿銘仙の半天に襷掛け」のみすぼらしい姿を想像し、苦悩する。身分の隔たりは、「上」においては親子の間にはっきりと引かれており、その描かれ方は「下」のお関と録之助にも見ることができる。先に挙げた父親の内心語は映画では発話されず、カメラがお関の風貌を捉えるだけである。ならば、④の学生が指摘したこの言葉は、映画という表現手段故の産物だといえよう（映画の限界というのは言い過ぎか）。「下」においても「丸髷」「小褄」「小菊の紙」「紙幣」といった身分そのものが差し込まれるが、映画においては、録之助の「ご身分の高い方」という言葉（セリフ）に収斂されていくのである。

この課題がアダプテーションの視点であることを踏まえたとき、記号―言葉という表現の問題を考えることができる。今回の授業ではそこまで行くことはできなかったが、大きな可能性を持った意見であった。

次に、⑤の意見を見てみよう。

⑤　原作には十三夜の月見はなく、映画には十三夜の月見はあるという昔の風習、また、自分の気持ちよりも家のことを優先するというこの風習を重ね合わせている。また、最後に綺麗な月を浮かべていたのは十三夜の物語の淋しさをより引き立て、また、離縁を諦め、録之助とも再開したばかりだけどすぐ別れるという割と淡々とした話の流れが、失恋のような、なにか大切なものを失ったかのような世界に変化している。

「原作には十三夜の月見はなく」というのは、学生の読み落としであるが、「月」に注目したのはこの学生だけであった。物語空間においてただの情景ではないことを、十三夜の月が照らすものというテーマで話す機会を設けたかったが、時間の都合上できなかった。「淋しさ」という情感を読み取りつつも、「なにか大切なものを失ったかのような世界」と表現しているが、余情を残す感想の言葉ではなく、言語化していくことにこそ自分の思いや考えを確かにすることの表れになることを自覚させたい。まさに学習指導の創意工夫を痛感した意見であった。

それは、次の意見からも伺うことができる。

⑥　私はお関と録之助が歩きながら話すシーンで、録之助の悲しげな表情が描写されたことから録之助が本当に反省していると考えます。それによって、十三夜のそもそもの録之助の人柄が変化したと考えます。

この意見を述べたのは、問２の①の解答者である。この学生の興味関心が録之助の人物像であることが解答を通じて伝わってきた。たしかに、録之助は反省の言葉を言っていない。家が没落しようが、娘が亡くなろうが、彼が口にするのは自虐だけである。その録之助の言葉から、学生は録之助への不信感を持っていたのであろう。芥川比呂志演じる録之助により、小説の人物像と映画の人物像が「反省」というキーワードにおいて変化したと述べている。しかし、これはあくまでも受け手側の主観を超えるものではない。はたして人物像の変化は映画がねらうところであったのか、それとも受け手の自由な想像に任せられる部分であろうか。教室で文学を読むダイナミズムは、まさにこのような学生の意見から生まれるのではないだろうか。

さらにいえば、ここには作品における読者の役割という受容の視点も含まれている。アダプテーション作品という前提のもと、学生が指摘したことは意図的にアダプトされたことか、それとも映像芸術の性質からくるものなのか、受容者であることの自覚を揺さぶられる議題に

なるのではないだろうか。

結びにかえて

現在、さまざまな分野でアダプテーション研究が行われている。本来は小説や戯曲の改作や脚色を意味する映画用語であり、文学と映画の研究も数多くなされている。国語科教育は文学理論教育ではないし、大学教育においても作品の感想を述べ合い、味わう鑑賞が、意外と学生に好まれたりもする。小稿で使用したアダプテーションは言葉だけを援用したきらいも否めない。だが、それぞれの教育課程において学びの質が見直されているように、従来行われてきた学習活動の手立てを、アダプテーションというフィルターをとおすことで、主体的に相対的に学び、深い学びの手段として再構築することができるのではないだろうか。

今後は、大学における文学教育と国語科教育法の視点から、小稿中で紹介した「走れメロス」の教材研究をとおしてアダプテーション研究としての形をつくり、授業デザインを行うことでその可能性を探り、実践報告を行う予定としたい。

1）管智子「高等学校国語教科書における『源氏物語』採録箇所の研究：桐壺巻・若紫巻採録の適切さを中心として」（「日本文学ノート52」宮城学院女子大学、2017年）によると、高等学校教科書9社全18冊に「桐壺」「若紫」が採択されている。

2）大和和紀『あさきゆめみし』1979年～1993年にわたり、講談社『mimi』『mimiexcellent』の雑誌にて載された。現在、講談社文庫（全10巻）、愛蔵版（全12巻）が入手しやすい。受験本として大和和紀監修、伊藤義司著『試験によく出るあさきゆめみし』（講談社、2008年）『試験にやっぱりよく出るあさきゆめみし』（講談社、2009年）が出版されている。

3）『マンガ　日本の古典』全32巻（中央公論社）、『NHK　まんがで読む古典』全３巻（ホーム社漫画文庫）、『学研まんが　まんがで読む古典』11巻（学研）などがある。

4）『まんがで読破』シリーズ。2021年2月現在、139冊出版されている。https://www.eastpress.co.jp/series/index/2（2021年2月3日最終確認）

5）木村陽子「国語教育とアダプテーション―高校『国語総合』教科書の「創作」課題の検証―」『教職課程センター紀要』第3号　大東文化大学、2018年。

6）アダプテーションについては、リンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』（片渕悦久（共訳）晃洋書房、2012年）など。他に、岩田和夫　武田美保子　武田悠一編『アダプテーションとは何か　文学 / 映画批評の理論と実践』（世織書房　2017年）、中村三春『〈原作〉の記号学　日本文芸の映画的次元』（七月社　2017年）、小川公代　村田真一　吉村和明『文学とアダプテーション　ヨーロッパの文化的受容』（春風社、2017年）参照。

7）大橋洋一「未来への帰還―アダプテーションをめぐる覚書―」岩田和夫　武田美保子　武田悠一編『アダプテーションとは何か　文学 / 映画批評の理論と実践』世織書房　、2017年。

8）注5に同じ。

9）光村図書出版「国語1」（平成27年度版）では、「立場を変えて、作品を書き換える」「書き換えた文章を読み合い、感想を交流する」学習がある。インターネット上でも多くの授業案が掲載されている。

10）文部科学省『中学校学習指導要領解説　国語編（平成29年告示）』

11）「学習指導要領解説」では、「解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解いたり、定められた手続を効率的にこなしたりすることにとどまらず、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくために必要な力を身に付け、子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。」としている。つまり、学んだ知識技能を活用して目の前のさまざまな課題を解決していくことが求められている。

12）「学習指導要領の方向性」光村図書出版ホームページ https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/c_kokugo（2021年2月17日最終確認）

13）「新編　新しい国語」東京書籍　平成27年度版、令和2年発行。

14）宗我部義則「そかべ先生の国語教室　比べることで読む力を引き出す」光村図書ホームページ https://www.mitsumura-tosho.co.jp/webmaga/kokugo/detail09.html（2021年2月17日最終確認）

15）樋口一葉『たけくらべ』集英社文庫、2020年。梗概は山田有策氏による。

16）新日本映画社、独立プロ名画保存会編集　解説リーフレット「にごりえ　独立プロ名画特選　今井正監督作品」※劇場版パンフレットより転載。新日本映画社　紀伊國屋書店2004年。

17）注16に同じ。